

京都府南部の縄文社会

—乙訓地域における縄文遺跡の 発掘調査を中心として—

1. 長岡京市伊賀寺遺跡出土の火葬墓の調査
岩松 保 P 1 ~ P8
2. 長岡京市における縄文集落の調査
岩崎 誠 P9 ~ P18
3. 縄文社会の実像
泉 拓良 P19 ~ P22

期日：平成 21 年 6 月 13 日 (土)

場所：長岡京市立中央公民館 3 階 市民ホール

主催 京都府教育委員会

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

共催 長岡京市教育委員会

後援 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市伊賀寺遺跡出土の火葬墓について

(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

資料係長 岩松 保

1. はじめに

近年、長岡京市の西南部を流れる小泉川流域では縄文集落の調査が進み、その様相がよく分かってきました。北から、奥海印寺遺跡、下海印寺遺跡（早期、中・後期）、伊賀寺遺跡（中・後期）、脇山遺跡（中期）、友岡遺跡（中期）、^{はざま}砦遺跡（中・後期）、やや離れて南栗ヶ塚遺跡（前期）があります。縄文時代の全期間を通じて、縄文人が小泉川流域でムラをあちらこちらに移動させて生活を送っていたことがわかってきました。ここで報告する伊賀寺遺跡は、小泉川の中流域の左岸に位置しています。

伊賀寺遺跡の南東部分に、第二外環状線道路とそれに接続する府道の建設が予定されました。工事により遺跡が壊れる範囲で発掘調査を実施し、縄文時代から長岡京期にかけての遺構・遺物が確認できました。縄文時代では、中期末（紀元前 2,500 年）と後期後葉（紀元前 1,500 年）の集落が見つかりました。

二時期の集落はやや位置を違えて見つかりました。中期の段階ではやや北側に位置し、後期の段階では南東に移動しています。中期の竪穴式住居跡では、石で四辺を囲った炉跡（石囲い炉）がありました。一辺 1 m 四方の大きなものです。また、一辺にだけに石を据えた炉跡もありました。

後期の段階では、北側と南側で複数の竪穴式住居跡が重なって分布していますので、北側と南東側の未調査部分にも多くの竪穴式住居跡があるものと推測されます。また、小泉川の河道により集落の南と西が削平されていることも分かりましたので、本来はより大きな集落であったものと考えられます。後期の段階では、比較的多くの人々が、長期間にわたってこの地に住んでいたものと想定されます。

縄文時代の火葬墓を検出したのは後期の集落の南辺部分、長岡京跡右京第 943 次調査の 2 トレンチで見つかりました。周辺では同時期の竪穴式住居跡 S H 01・25、土壙墓と判断される土坑 16 基を検出しました。いずれも縄文時代後期後半（元住吉山式）のもので、遺構の重複の先後関係から、住居→土壙墓→火葬墓の順に土地利用されたものと推定されます。

2. 火葬墓 S K 03 の調査

火葬墓 S K 03 は、平面形が卵形をなして、長径 124cm、短径 105cm、深さ 50cm の坑に多数の人骨片が納められています。骨は細片となっており、一部大きな骨が並べたようになっていましたが、一見してバラバラな状態でした。

これらの骨は、白っぽくなっており、骨の表面がひび割れたり、ねじれたり、はぜたりしています。骨がこのようなになるには、骨の中のミネラルや水分が十分にある段階——骨が乾ききっていない状態の時に、高温で焼かれなければならないそうです。古人骨に詳しい京都大学の片山先生によると、死後何ヶ月以内とは一概に言えないとのことですが、乾燥しにくい冬であっても数ヶ月、一冬を越えたような骨ではこのようにならないとのことですので、おそらく、まだ肉が付着した段階、死亡直後に焼かれたと考えられます。

また、火葬墓内部の壁面には火を受けた痕跡は認められませんでした。第 3・4 層で焼土が見つかりましたが、これらは砕かれた状態で、他処から移設されたものと考えられます。先に見たように、骨を高温で焼くには、新鮮な空気を十分に取り入れる必要がありますので、おそらく、地表で薪木を組み上げて、遺骸を焼いた後に、骨や焼土を土坑に納めたものと言えます。

土坑内の堆積土層を見ると、まず最下位に第 5 層の茶褐色土を 10～20cm、その上に焼土・炭が多く混じる第 3・4 層が 10cm 程度あり、その上位に骨片を多く含む第 2 層の暗茶褐色土が 25cm 程度堆積しています。比較的大きめの人骨が並べられていたのは第 2 層上面で、同じ面に注口土器 1 点が置かれています。これを埋める第 1 層の暗褐色土にもわずかながら骨片が含まれていました。

第 3・4 層の焼土にわずかに骨片が混じることから、遺骸を焼いた場所の焼土を削り取って埋めたものと判断できます。第 5 層には炭・骨・焼土が混じっていないので、坑を掘った土砂を戻して整地したものでしょう。第 2 層は微細な骨片・骨、炭化物が多く混じり、焼土がほとんど混じらないことから、火葬終了後、地表に堆積した炭化物・骨を納めたものと考えられます。第 2 層上面には比較的大きめの人骨が並べられていたので、火葬終了直後に大きな骨だけを取り置いたと考えられます。第 1 層にも微細な骨片が含まれていましたが、その量もわずかであることから、意図的に骨を混入したものではなさそうです。

注口土器は注口部分が欠損していますが、ほぼ完形です。意図的に打ち欠いて墓に供えたものです。そのほかに、石鏃 2 点、緑色の碧玉片、その他に土器片が出土しました。

土坑内の土砂を洗浄した結果、回収した人骨の総重量は約 10kg でした。火葬墓出土の人骨は、京都大学大学院理学研究科自然人類学研究室片山一道教授にお願いし、同研究室の大藪由美子さんが中心となって鑑定していただきました。

鑑定の結果、下顎骨右側の骨が9点重複していました。これら下顎骨は、成人のもの8個で、10代後半の子供のものが1個でした。顎の数から、9人が葬られたことがわかります。これ以外にも、尺骨や椎骨に幼児のものが混じることから、少なくとも10体の遺骨が葬られていたことがわかりました。男女比はわかりませんでした。

3. 火葬墓 S K 26 の調査

火葬墓 S K 26 は平面形が長方形で、その規模は 405 × 285cm (最大)、400 × 240cm (中央)、深さ 40cm (最大 50cm) と大きいものです。埋土は下から、褐色礫混土—暗茶褐色土—暗褐色砂礫が堆積しており、中層の暗茶褐色土は厚さ 10 ~ 15cm で、焼土・微細な骨・炭が多量に含まれていました。この層は土坑の全面に広がっていて、火葬墓 S K 03 のあり方とは異なります。これらの骨は細かすぎて、骨であることは間違いありませんが、確実に人骨であるとは鑑定できませんでした。

しかし、土坑の西南部で頭蓋骨・下顎骨・肋骨・椎骨・肩甲骨・四肢長管骨・手骨・足骨といった人の全身の骨が、四肢長管骨を中心として束ねられた状態で見つかりました。この例から、S K 26 もまた、人を火葬した火葬墓であること、その埋納方法は一体分の骨を焼土・炭化物と一緒にして集め置くということがわかりました。焼土・微細な骨・炭化物は、平面的に見ると4ないし5群に分布していますので、それぞれが一体分の遺骸を火葬にして、埋納した痕跡であると理解できます。骨は火葬墓 S K 03 のものと同じ状態で、新鮮な骨を焼いています。

内部の石や土坑の壁面が焼けていないこと、焼土は小さな塊となって砕かれた状態であること、炭・人骨・焼土が層序をなして堆積していないこと、人骨が束ねられた状態であることから、他処で火葬された骨・炭化物・焼土が土壌内に納められたものです。

埋土中には縄文土器片が比較的多く混じっていましたが、火葬墓 S K 03 とは異なり、意図的に埋納されたものは確認できませんでした。洗浄土中より、碧玉製玉 10 数点、石鏃 4 点、サヌカイトの剥片を多く回収しました。近くに竪穴式住居跡がありますので、生活空間として利用されていた段階のゴミが、偶然に入り込んだ可能性があります。

土坑内の約 1 / 2 の土砂を洗浄して回収した人骨の総量は約 1 kg でした。この土坑の骨は細かくなりすぎており、全身の骨が集められているものが性別不明の成人 1 体と判明しただけで、骨からは何体葬っているのかはわかりませんでした。骨・焼土の分布から、4 ~ 5 体以上が葬られていたと思われます。

4. 火葬の契機と意義

人骨から推定される考古学上の問題点を少し検討しましょう。

火葬墓 S K 26 でも全身の骨が集め置かれているのが確認できたことから、それぞれが別個の墓として用いられたことは明らかです。

火葬墓 S K 03 と火葬墓 S K 26 では、人骨を埋納する方法が異なっています。火葬墓 S K 03 では、10 体の人骨がまとまりもなくバラバラになって埋納されているのに対して、火葬墓 S K 26 では、一個体の人骨・焼土・炭化物をまとめて集め置いています。このように、埋納する方法が異なっていますが、これらの違いが何を意味するのかはわかりません。

火葬墓 S K 03 は、副葬品としての土器が最上位に置かれていることや土層の間に流入土が認められないことから、最低でも 10 人の人骨が同時に埋納されたことは間違いありません。火葬墓 S K 26 では 1 体分の人骨しか確認できませんでしたが、複数の人骨を埋納したことは明らかです。土層の観察では第 2 層中に間層が認められませんので、さほど時間を経ずしてこれらの人骨が納められたと推定されます。また、火葬墓 S K 03 と火葬墓 S K 26 は、放射性炭素年代によると同時もしくは相前後して作られたものと言えます。

そうすると、火葬墓 S K 03 と火葬墓 26 には、同時もしくは相前後して 10 数人の火葬骨が次々と納められたと言えます。ここで問題なのが、これらの人々がほぼ同時に亡くなったのか、その契機は何だったのか、です。

火葬骨が合葬された経緯については数案が考えられます。火葬墓 S K 03 を基に考えてみましょう。

まず、①案として、数ヶ月以内に少なくとも 10 人が亡くなり、同時に火葬を行った場合です。もし疫病や戦い等でほぼ同時に 10 人が亡くなるという異常事態があったとすれば、10 人が亡くなった上に彼らを火葬するだけの人員が、伊賀寺遺跡周辺に居住していたと想定することができます。一般的に、縄文時代のムラは、数棟の竪穴式住居が建ち並び、人口 20 人程度のムラであったと想定されていますので、それほど大きな集落があったのか、という問題があります。しかも、もし疫病で大量の人が亡くなったのであれば、埋納された骨に幼児・小児のものが少ないという点が説明しがたいと思われれます。

②案として、遺骸をそのまま土壌内に納めるのではなく、その都度、火葬をしてから土壌に納め、後に土壌を掘り返して、10 体分の火葬骨を集めたと考えることができます。しかし、火葬骨を納めた墓を掘り返して骨や焼土を集めた場合、それらを再埋葬すると、骨や焼土には土砂がブロック状に混じったり、骨と焼土・炭をきれいに分けられないという難点があります。

③案として、別々に亡くなった人々をその都度火葬にした上で、焼骨を甕等に入れて保管し、10 体分集まった時点で合葬したと想定することができます。個々の骨を別個に保

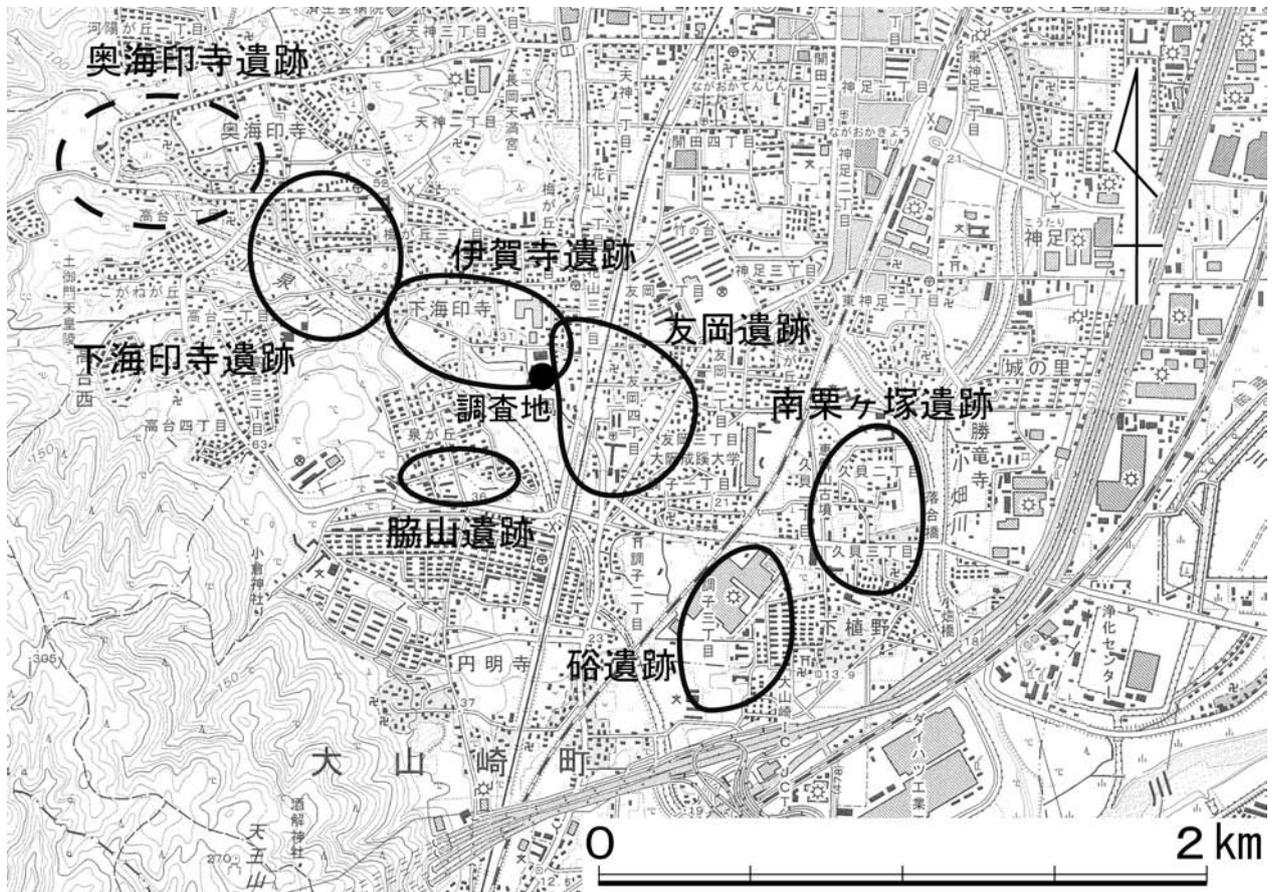
管すれば、骨層の中に不純物が混じらないことも納得できます。

これらの3案のうち、いずれであるのか、またそれ以外の可能性があるのかは、今回の事例だけでは決めがたいものです。また、焼土や炭までも、骨と一緒に埋納するという点もよく分からないところです。

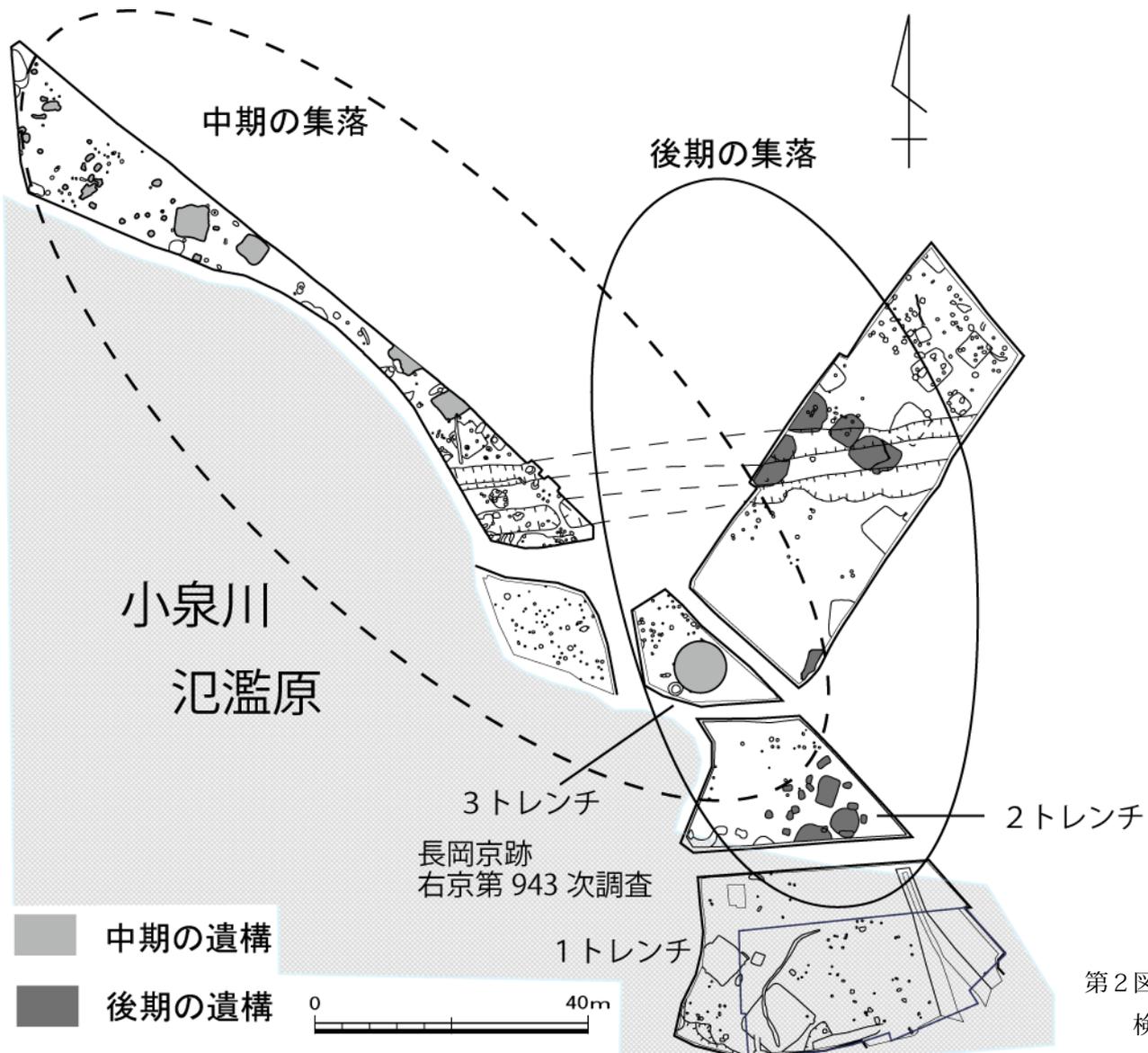
縄文時代の葬制は、土壙墓・土器棺墓が一般的であり、火葬は比較的珍しいものです。縄文時代の火葬は、骨化が進んだ段階で焼かれたと考えられています。

縄文時代には数体から十数体、多い場合には百体近くの人骨を一つの坑に納める墓があります。これらは、一旦、土壙に納められた遺骸が骨化した後に掘り返して、多くの人骨と一緒にして納めたもので、再葬墓と呼称されています。これらは、複数の小集落が、一つの大集落になって共同していく際に、それぞれの墓から祖先の人骨を掘り出し、持ち寄って、統合の象徴として作られたと考えられています。縄文時代の火葬は、再葬を行う際に、土壙墓から掘り出した骨にまだ肉が遺存していた場合、肉を無くして骨だけにするために火葬が行われたと考えられています。

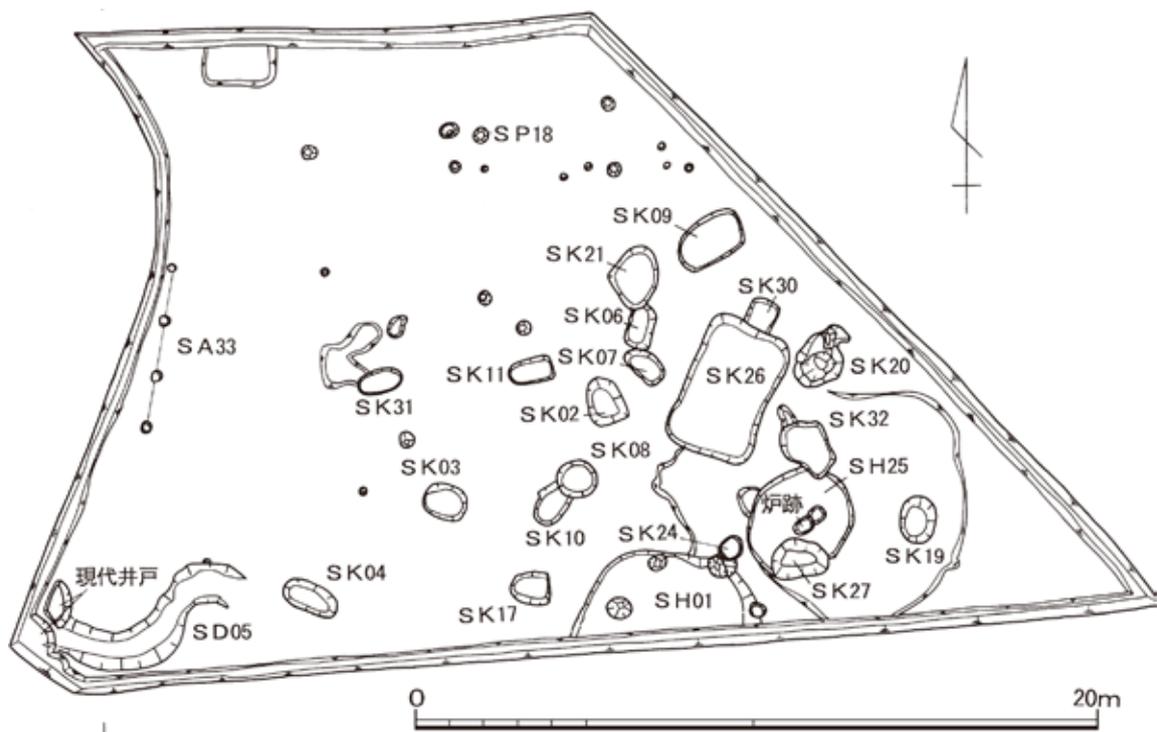
伊賀寺遺跡の事例は、それとは異なり、亡くなった直後に火葬されたことは明らかです。こういった葬送内容が伊賀寺遺跡だけで執り行われたとは考えがたく、全国の火葬墓の事例の中に位置づけていくべきものと思います。そのためにも、過去に報告された事例もまた、“死後さほど時間が経ていない段階で火葬されたのか、どうか”という視点で再検討する必要があると考えます。



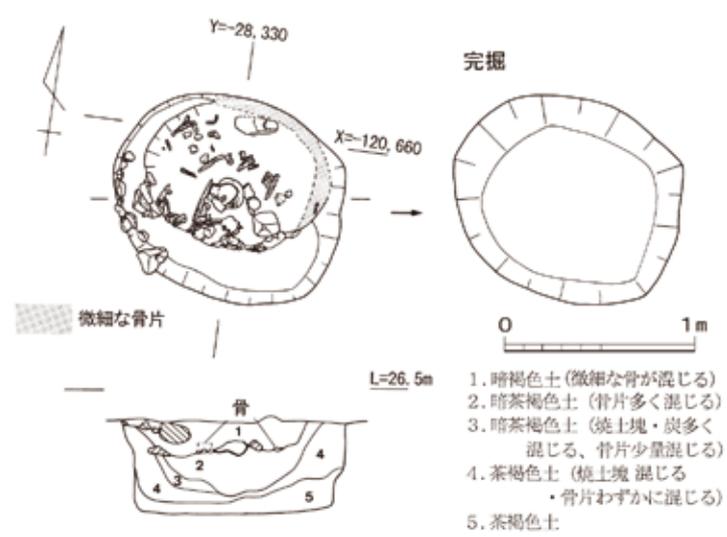
第1図 小泉川周辺の縄文集落分布図



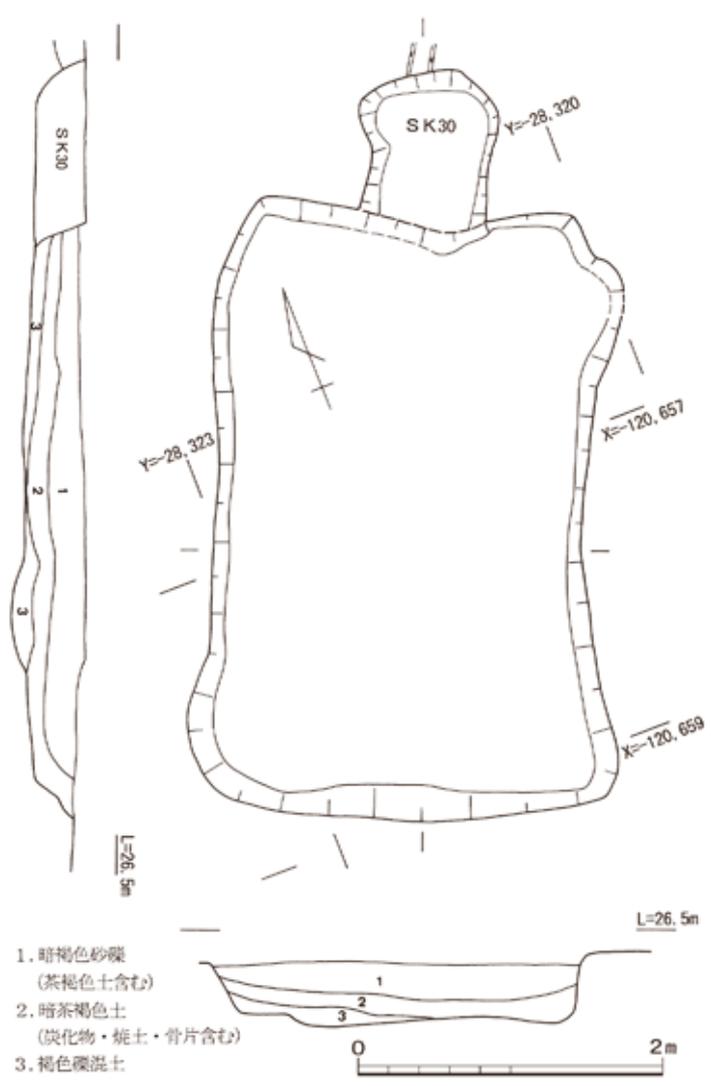
第2図 伊賀寺遺跡 検出遺構配置図



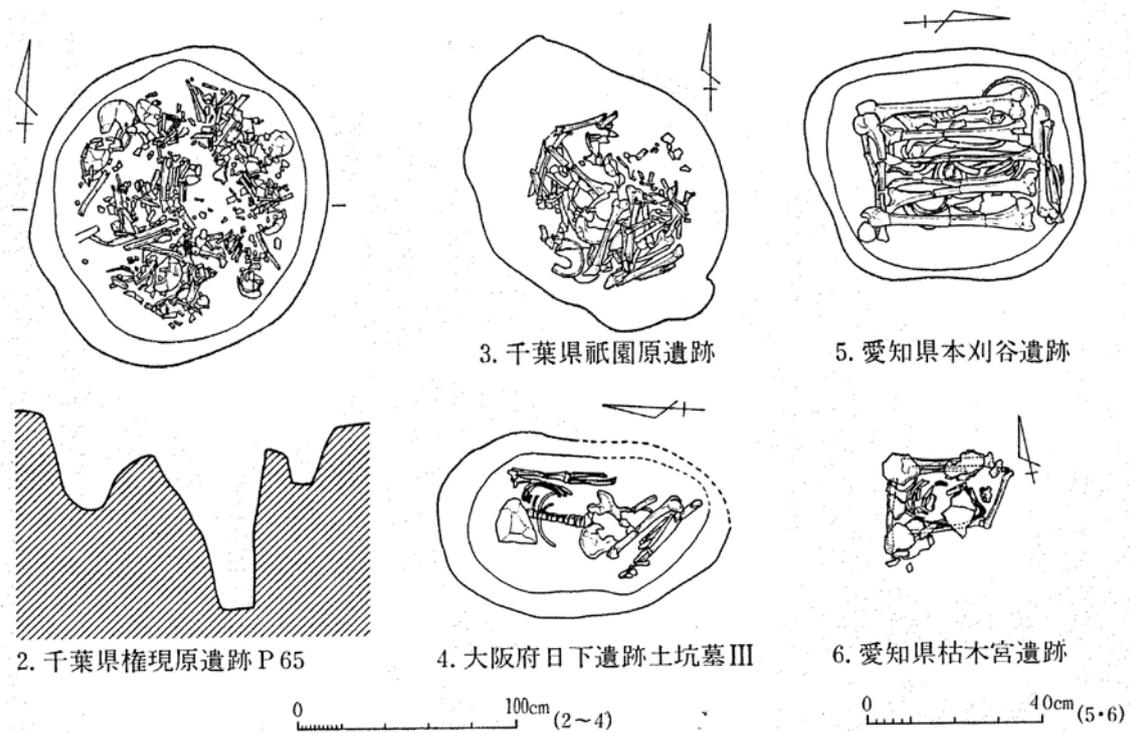
第3図 長岡京跡右京 943次 第2トレンチ検出遺構配置図



第4図 火葬墓S K 03 実測図



第5図 火葬墓S K 26 実測図



第6図 縄文時代の再葬墓

付表1 火葬墓S K 03・26比較

	火葬墓S K 03	火葬墓S K 26
規模	124cm × 105cm、深さ 50cm	405 × 285cm、深さ 50cm
個体数	10体 (顎9体、尺骨1体)	1体
死亡年齢	壮年 (顎：25 ~ 40歳) 壮年以上 (顎) 子供 (顎：10代後半) 子供 (尺骨：1 ~ 5歳) 子供 (椎骨：3 ~ 4歳)	成人
男女比	不明 男性・女性の骨あり	不明
副葬品	注口土器 1	—
出土遺物	玉破片?、石鏃 2、土器片	玉・玉破片?、石鏃 4、サヌカイト片、土器片
その他	変形性関節症の下顎骨 2 歯の脱落痕 3 個体 (抜歯?)	骨片多数

長岡京市における縄文集落の調査

(財) 長岡京市埋蔵文化財センター
調査係総括主査 岩崎 誠

1. はじめに

長岡京市周辺部の発掘調査で、最近、縄文時代の土器・石器類などの遺物や、住居・墓などの遺構がまとまった形で見つかり、話題を呼んでいます。たとえば、京都市埋蔵文化財研究所が調査された上里遺跡^{かみさと}、京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査された伊賀寺遺跡をはじめとして、長岡京市埋蔵文化財センターが実施した南栗ヶ塚遺跡^{みなみくりがつか}や下海印寺遺跡^{しもかいいんじ}の調査などがあります。そこで、今回のセミナーのテーマが縄文時代に選ばれたのだらうと思います。最近の縄文時代に関する調査のうち、たまたま南栗ヶ塚遺跡で1か所、と下海印寺遺跡で2か所の調査を私が担当しました。これが幸運なのかどうかわかりませんが、その縁あって、今回、発表させて頂くことになりました。この機会に、長岡京市の縄文土器と遺跡をまとめることにしました。

2. 最近の調査から

① 南栗ヶ塚遺跡（第1～3図）

A. 検出遺構

- ・前期の竪穴住居と、遺物を包含する窪地を検出
- ・竪穴式住居 前期の住居跡は近畿地方で8遺跡目、京都府下で3遺跡目。
- ・窪地 土器、石器、動物焼骨が出土。貝塚のようなゴミ捨て場。

B. 出土遺物

a. 土器（泉拓良・稲畑公平氏による検討）

- ・縄文時代前期の土器群 北白川下層Ⅱ a式から大歳山式までの豊富な資料である。
- ・近畿地方でも前期後半の良好な資料である。
- ・京都盆地西南部（乙訓地域・桂川右岸）では初めての、前期のまとまった一括資料。

b. 石器類（上峰篤史氏他による検討）

- ・石器には、大量の石鏃、磨石・敲石の他、石匙、石錐、石斧、石錘、軽石

などがある。

- ・剥片や石核も非常に多く、金山産と思われる石材も含まれている。

c. 動物遺存体・焼骨（松井章・納屋内高史氏による検討）

- ・全てほ乳類の小・細片で、ニホンジカが多く、イノシシもある。一般的な食材。
- ・細片資料となっているが、前期後半の時期が限定できる好資料。

C. 意義

縄文時代前期の桂川右岸を代表する遺跡。地域活動の拠点的集落。集落は小規模。

② 下海印寺遺跡（第4～6図）

A. 検出遺構

- ・後期柱穴群、土器埋設遺構、土石流堆積？などを検出
- ・土器埋設遺構 土器棺墓か？
- ・北東－南西方向に横たえて埋設。上部は削平を受けている。
- ・口縁部は北東方向。僅かに口縁部を上げるように設置。
- ・検出状況での口縁部残存高は約5cmで、直径約30cmの口径とした場合、当時の生活面が最低でも25cmほど削平されていると考えられる。
- ・柱穴群 平地式住居（掘立柱建物）か、竪穴式住居か不明。
- ・直径約50cm前後、深さ約50cm前後の残存状況で、掘立柱建物の柱穴とした場合、掘削当時の深さは最低でも75cmにもなる。竪穴住居床面から検出される支柱穴の深さは、深いものでも60cm程度であることからすれば、竪穴住居が削平を受けて、柱穴だけが残存した可能性も考えられる。とはいえ、掘立柱建物の可能性も捨てきれない（泉拓良氏教示）。
- ・土石流堆積？包含層
- ・調査区南部に厚く認められ、後期の土器とともに早期の土器が混じる。
- ・小泉川に関連する、縄文時代後期頃の土石流堆積と考えられ、近隣の早期遺跡堆積層を巻き込んで堆積したものと考えられる（植村善博氏教示）。

B. 出土遺物

- ・早期の高山寺式、中期の船元式、後期の中津式～北白川上層式段階の土器（泉拓良氏教示）がある。
- ・下海印寺遺跡で中期の土器片が出土したのは初めて。
- ・石器類には石鏃、石錐、石錘、磨石・敲石、石皿などの他、剥片などがある。

C. 意義

今までの調査で、後期の集石遺構、土坑、配石遺構などが検出されているが、新たに、

柱穴群や土器埋設遺構が検出できた。柱穴群の検出は、上部構造の確定に至らなかったものの、住居址に関わる遺構としての位置づけに大きな意味を持ち、居住域の中核部位置が明らかになったことは大きな成果といえる。しかも、数棟の重複も考えられることから、縄文時代後期の長期居住集落と見ることができ、小泉川を媒介とした縄文時代後期の拠点集落であることを裏付けることができた。

今回の調査でも、早期の土器が十数点出土したことは、早期の居住域に近い位置であることが追認できた。

中期の土器が出土した事実は、細片が2点とはいえ、下海印寺遺跡に中期の居住期があったことを新たに知り得た。

草創期・早期と中期の状況は遺物出土があるほか、不明な点が多いが、後期では長期にわたって拠点集落としての位置づけができる。

3. 長岡京市内出土の縄文土器

長岡京市での縄文遺跡調査はここ数年でかなりの進展を見せている。これらの調査出土遺物も、調査の増加に比例して増加し、長岡京市内、あるいは乙訓地域さらには桂川右岸の京都盆地西南部の土器編年が可能な段階に達してきた。草創期の土器資料はないが、早期を下海印寺1式（高山寺式）、前期を南栗ヶ塚遺跡A～F式（北白川下層Ⅱa式～大歳山式）、中期を友岡1A～1E式（鷹島式～船元Ⅳ式）～伊賀寺式（北白川C式）、後期を下海印寺3A～3E式（中津式～北白川上層式）を提案し、土器研究が進んでいる北白川地域や、他の地域との比較の糧としたい。

4. 長岡京市内の縄文遺跡

桂川右岸の遺跡群（京都市西京区・向日市・長岡京市・大山崎町）のうち、ここでは善峰川と小泉川に挟まれた地域を中心に扱う。なお、遺跡の固有名は、縄文時代の一つの集落範囲を表すものではないため、基本的に、長岡京跡の調査次数略号（長岡京跡右京域第何回目調査を「R 123」、左京域を「L 123」などと表記）や、旧地名小字で表現した。一つの遺跡内にいくつかの遺物・遺構の集中地域が認められる場合は、井ノ内北や今里西のように、固有遺跡名範囲内の方角で表現する場合もある。

（1）長岡京市内の縄文遺跡変遷（第7～13図）

縄文時代の遺物出土地点を網羅してみると、第7図のように、善峰川右岸、坂川・風呂川流域、犬川流域、小泉川左岸地域の3遺跡群に分けることができる。まず時期別に概観する。

【草創期】（第8図）の場合、土器を伴った調査成果はない。風呂川上流から犬川流域、小泉川左岸、離れて大原野遺跡がある。下海印寺・伊賀寺のグループと、舞塚を含む東代・今里西グループ、善峰川上流の支流社家川上流大原野地域の3グループがある。

【早期】（第9図）では、小畑川右岸の大枝、善峰川右岸の井ノ内北、小泉川左岸の下海印寺・裕の3グループがある。台地の段丘に立地している。下海印寺では、土器の出土量が豊富で、大枝でも数点の土器が出土している。土器の出土を重視すれば、大枝と下海印寺の2カ所が狩猟拠点集落と考えられる。このうち下海印寺は、草創期との重複地点である。大枝を、大原野草創期集団から続く集団と考えれば、当地域に2集団活動していたと考えられる。

【前期】（第10図）では、豊富な遺物と竪穴住居1棟が検出された南栗ヶ塚、土器が数点出土した開田、1点報告されている水垂、三角形の石匙のみが出土した井ノ内北、今里、神足の6地点がある。神足と開田は約400mの間隔で狭いが、他の各地点間は、およそ1kmの間隔で分布する。草創期・早期で痕跡を残した小泉川左岸に、この時期の活動痕跡が見られない。犬川上流の緩扇状地から氾濫原（開田十三と開田）への散布地進出が、新たな展開といえる。

【中期】（第11図）では、小泉川と犬川の周辺に集まるほか、坂川地域に今里、善峰川右岸に井ノ内北と井ノ内北東（上里）の3地点がある。井ノ内北部では土坑が、井ノ内北東と今里では少量の土器片が出土している。犬川流域に位置する開田や友岡北では、まとまった土器片や石器類が出土している。小泉川流域には、上流から下海印寺、伊賀寺、友岡、裕があり、左岸河岸段丘に狭い間隔で並ぶ。このうち友岡では、前半期の土器が非常に多く出土している。また伊賀寺では、後半期の竪穴住居が検出されており、拠点集落の様相が具体的に捉えられ始めている。このように、善峰川沿いでは井ノ内北、風呂川・坂川沿いでは今里、犬川沿いでは開田と友岡北、小泉川沿いでは伊賀寺と友岡で、安定した定住集落といえる遺跡の所在が指摘できる。遺物分布地点の増加は、前期以前の状況と比べて歴然としており、分村の結果として捉えることができる。

【後期】（第12図）では、善峰川・坂川・風呂川流域の井ノ内・今里グループ、犬川流域の開田・神足グループ、小泉川流域の海印寺・友岡グループの3地域に分けることができる。また小畑川が形成した扇状地付近にも土器の出土が馬場で報告されているが、この地域の様相は不明な点が多い。これを除き、中期の分布状況と比較すると、井ノ内・今里グループでは、中期と重複する地点が、井ノ内北・井ノ内北東・今里の3地点で、新たに今里西への広がりを見せる。開田・神足グループでは、開田・友岡北で中期との重複があるほか、北西方向の開田城ノ内や南東方向の神足への広がりを見せる。海印寺・友岡グルー

プでは、下海印寺・友岡・碓の3地点で中期との重複が見られ、小泉川上流域の奥海印寺への広がりが見られる。特に、井ノ内・今里グループと、開田・神足グループの広がり、めざましい。明確な居住遺構には、井ノ内南と伊賀寺で竪穴住居、下海印寺で柱穴群や集石・配石遺構のほか土器埋設遺構などがある。遺物出土地点の増加は、中期以後の分村の急進時期に当たると考えられる。

【晩期】(第13図)では、分布状況が一変する。後期までは、遺構検出立地が台地の縁辺部、または段丘を覆う扇状地や緩扇状地にあることが多かったが、晩期になると、上里や馬場・雲宮のように、低地一般面の氾濫原や小畑川の形成した扇状地などにも広がりを見せる。遺構・遺物の分布状況は、善峰川右岸、坂川・風呂川地域、犬川流域の開田地域と南栗ヶ塚、小泉川左岸の奥海印寺と友岡、小畑川が形成した扇状地の雲宮地域の7地域に分けることができる。集落の様相が具体的に捉えられてきた地点は、上里だけで、他の多くは、土器棺墓と考えられる土器埋設遺構の単独検出地点によるものや遺物包含層である。後期と重複する地点は、上里、井ノ内北、今里、今里西、開田、奥海印寺、友岡などにあり、7区分した地域に少なくとも1地点ある。後期に栄華を極めた小泉川流域では、分布地点が激減している。小畑川の形成した扇状地での分布の広がり、画期的で、目を見張るものがある。また、弥生時代畿内第I様式との重複地点も、石見町南、上里、今里、開田、雲宮、南栗ヶ塚など、奥海印寺と友岡を除く5地域に見られる。縄文時代晩期の分布状況を、畿内第I様式の分布状況と比較した場合、縄文時代後期から晩期への分布変化より緩やかで、画期的な大きな変化は見られない。縄文社会の体制や構造を包括した縄文文化の成熟の上に水稻文化が受け入れられ、緩やかに、しかも急速に浸透していったものと思われる。

(2) 小遺跡群の様相

- ① 善峰川右岸遺跡群 早期に始まり、中期に2地点となり、晩期に上里を拠点にひろがる
- ② 坂川・風呂川流域遺跡群 草創期から始まり、前期・中期の各1遺跡から後期に急増する
- ③ 犬川流域遺跡群 前期に突然4地点現れ、中期に減少するが、後期に急増する
- ④ 小泉川流域遺跡群 草創期～早期を経て断絶し、中・後期に急増し、晩期に激減する

5. まとめ

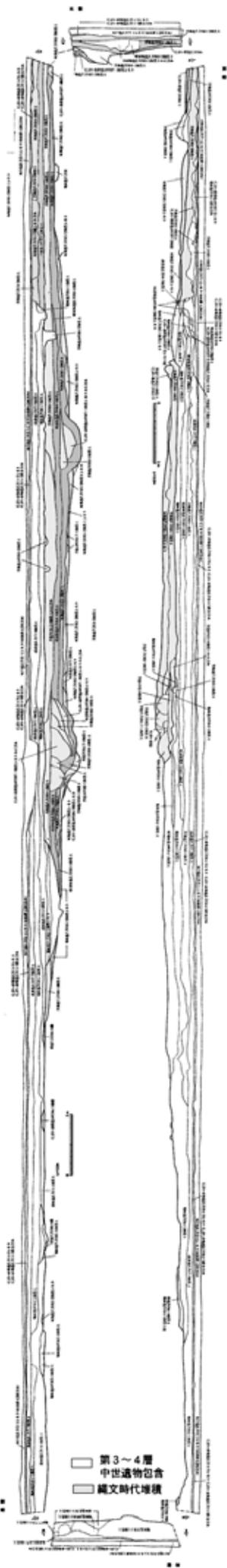
今回は、長岡京市内の縄文遺跡を中心にまとめることに主眼をおいた。

一つは、最近の長岡京市が調査した縄文遺跡の報告。一つは当地域の土器編年の状況。

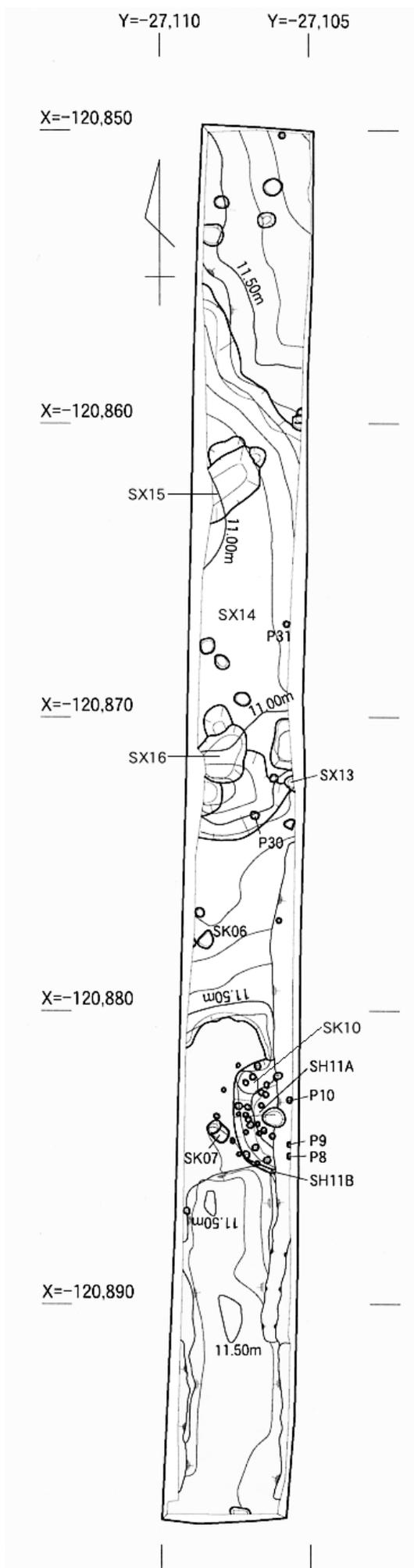
14

一つは、遺構・遺物出土地点の分布とその意義についてまとめた。

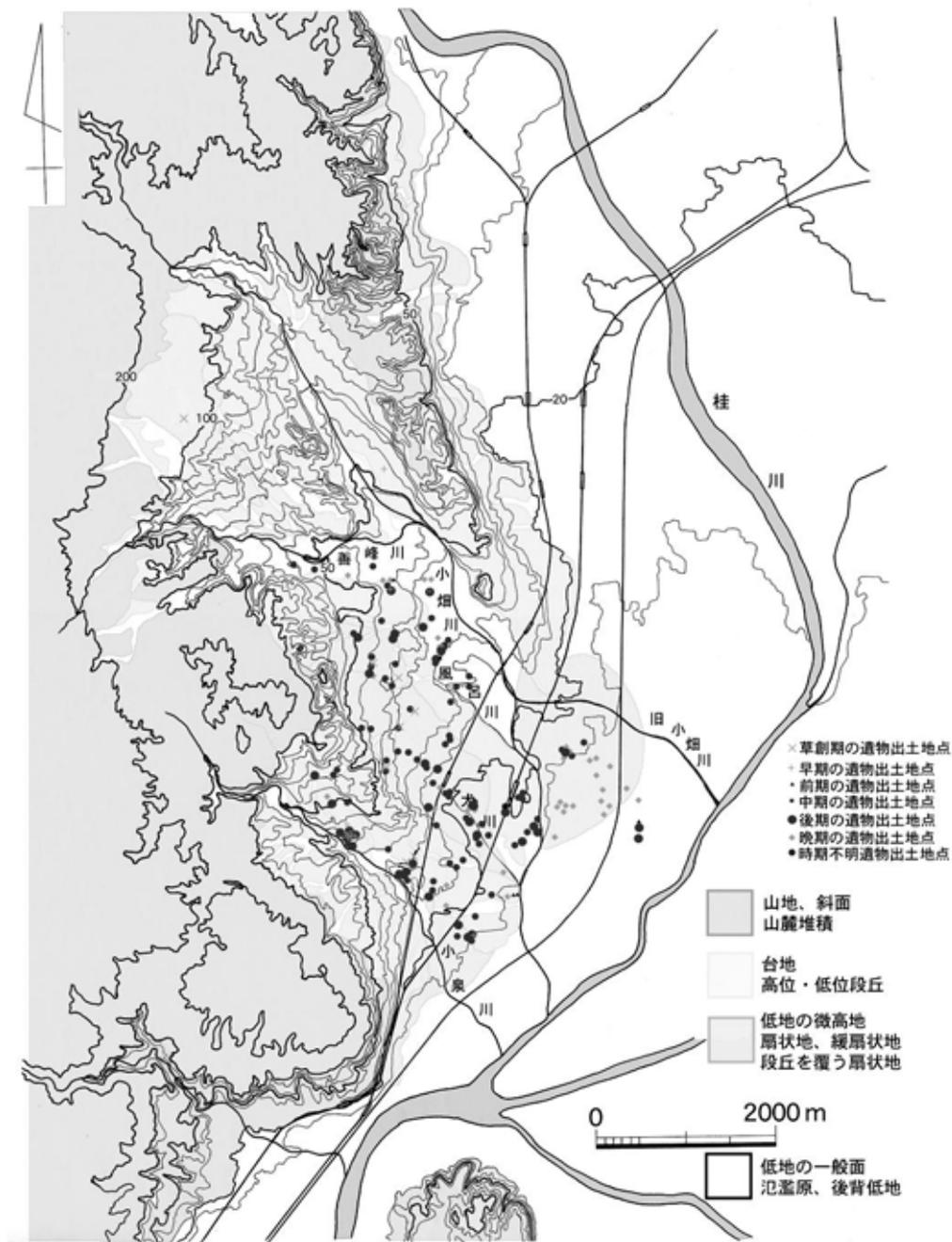
これを機に、当報告を各方面からご叱正いただければ、望外の成果と思います。



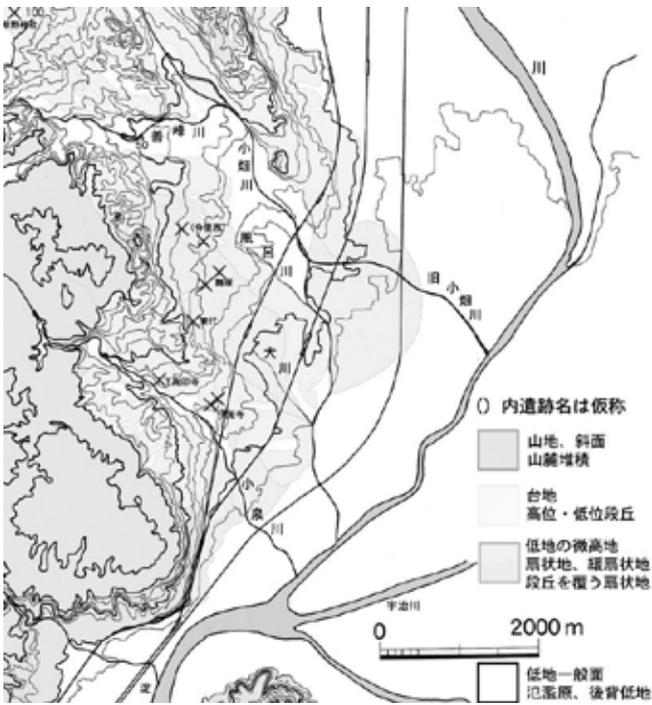
第1図 南栗ヶ塚遺跡
調査断面実測図 (R955)



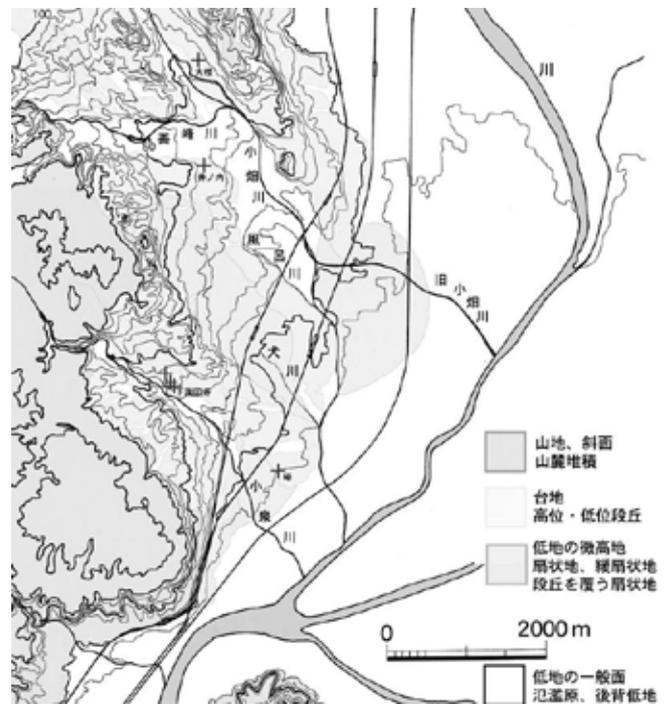
第2図 南栗ヶ塚遺跡調査平面実測図
(縄文前期の遺構；R955)



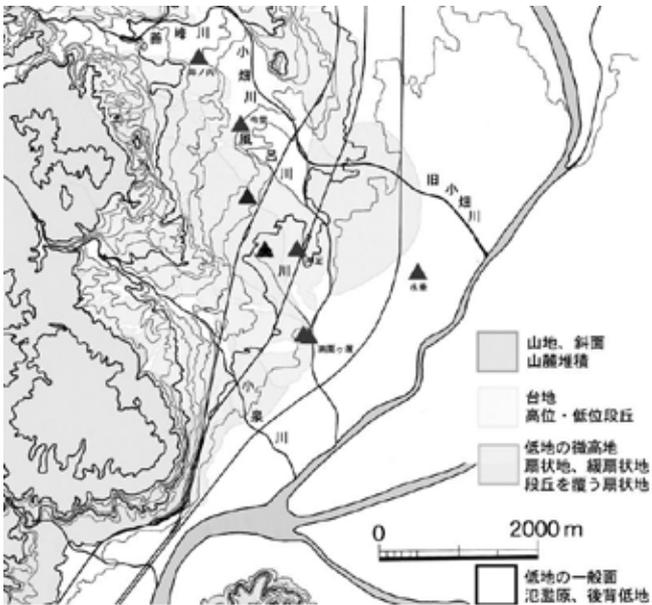
第7図 長岡京市周辺の縄文時代遺物出土地点と立地条件



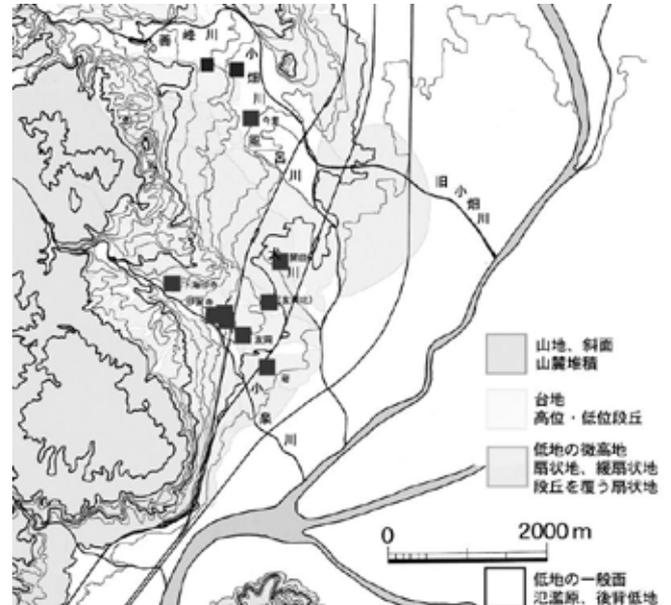
第8図 草創期の遺物出土地点



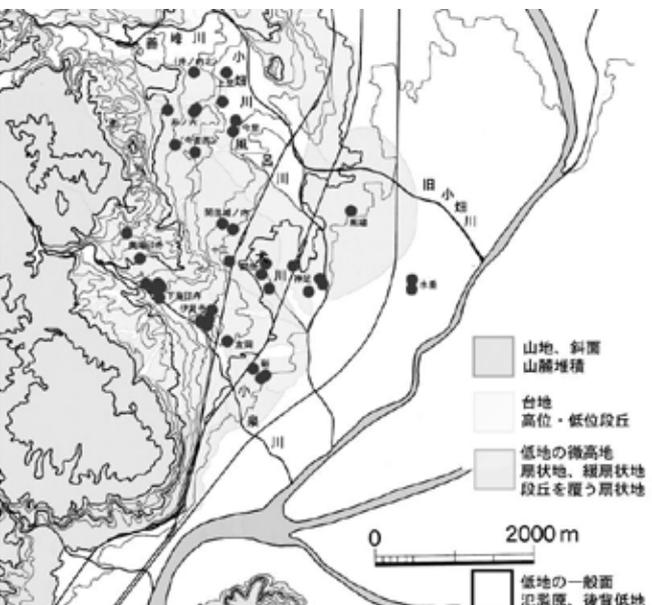
第9図 早期の遺物出土地点



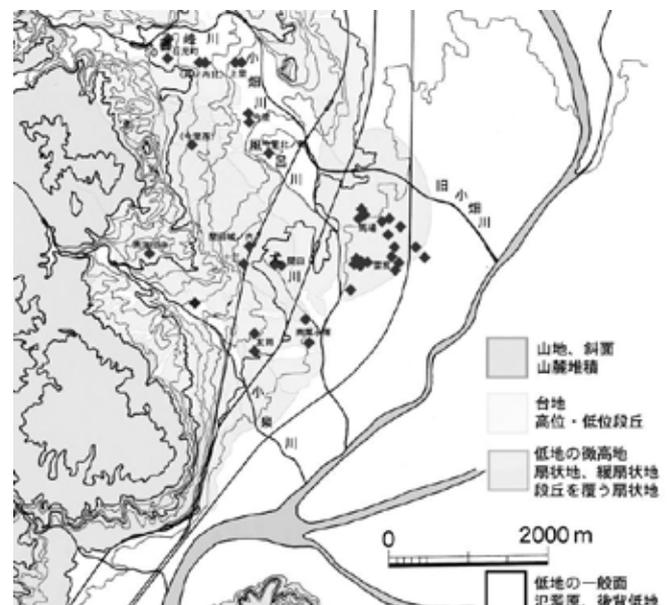
第10図 前期の遺物出土地点



第11図 中期の遺物出土地点



第12図 後期の遺物出土地点



第13図 晩期の遺物出土地点

縄文社会の実像

— 近畿地方での新発見例を考える —

京都大学大学院文学研究科

教授 泉 拓良

1. 縄文時代とは

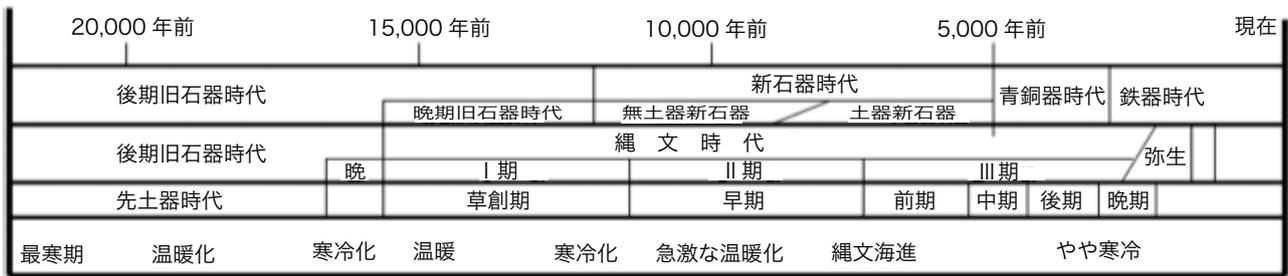
- ① 縄文時代の始まりは「土器の出現」か？
- ② 縄文時代の始まりは氷河時代に遡るのか？そして環境変化と対応するのか？
- ③ 縄文時代の6時期区分はその時代観を反映しているのか？
- ④ 縄文人は主に何を食べていたのか？
- ⑤ 縄文時代に農耕はあったのか？あったとしたら何を栽培していたのか？
- ⑥ 縄文人はどのような住まいに住んでいたのか？
- ⑦ 縄文人の村はどのような構造だったのか？
- ⑧ お墓はいつから作るようになったか？
- ⑨ お墓は何処にあったのか？

2. 近畿地方での最近の縄文遺跡発見例

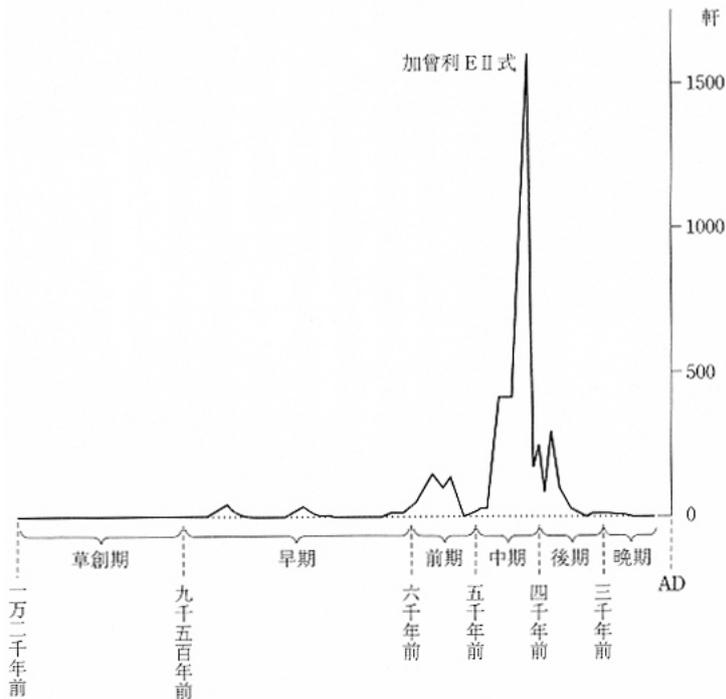
- ① 京都府京都市上里遺跡
縄文晩期中頃の竪穴住居からなる集落と豆類の発見
- ② 京都府長岡京市南栗ヶ塚遺跡
縄文前期竪穴住居の発見、乙訓縄文集落の原点
- ③ 京都府長岡京市伊賀寺遺跡
縄文中期末集落の発見、後期中・後葉の集落と火葬墓
- ④ 奈良県御所市・橿原市観音寺遺跡
縄文晩期中頃の平地式建物群の発見、土壙墓と土器棺墓、集骨葬
- ⑤ 和歌山県かつらぎ町中飯降遺跡
縄文後期前葉の集落と巨大木柱竪穴住居の発見。
- ⑥ 滋賀県六反田遺跡
縄文後期末～晩期前葉の貯蔵穴群と土偶

3. 新発見の意義

以上のここ2年間での新発見は、これまでの近畿地方、ひいては西日本の縄文時代像を変えるほどのモノであった。その一方で、2-①と②に見られるような、住居形態や生業形態が正反対となる発見もあり、いずれを一般化すべきか悩む問題が生じてきた。また、平地式建物には通常の柱をもつ住居と半截木柱をもつ建物があり、⑤で発見された巨大竪穴住居の系譜が気になる点であろう。また、火葬墓、集骨葬墓、小児集骨土器棺墓など複雑な墓制が明らかになり、あらためて縄文後晩期の複雑さを知ることになった。この小差については、講演にて明らかにする予定です。

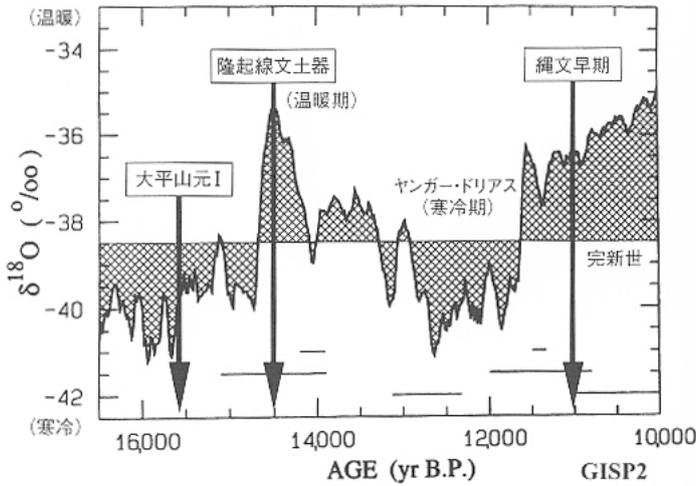


第1図 縄文時代の時期区分

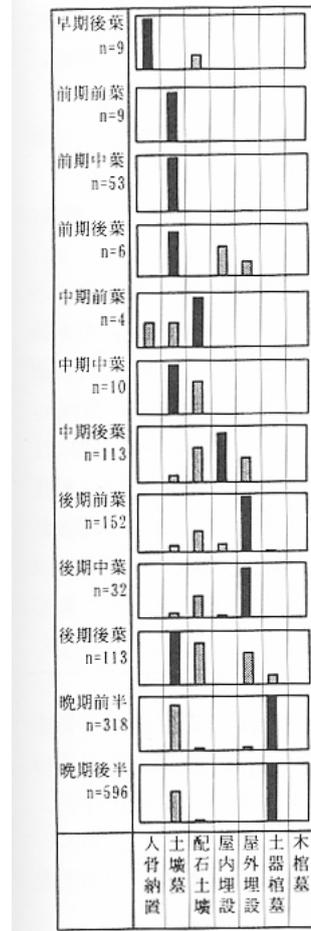


南西関東における竪穴式住居跡数の変動（100年あたり何軒発掘されているかを縦軸に表示）

第2図 縄文時代の竪穴式住居跡数の変遷

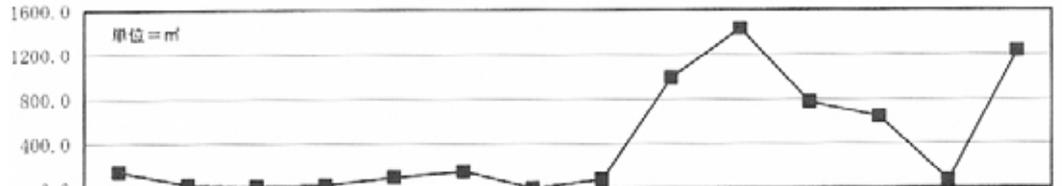


第3図 晩氷期の環境変動と縄文開始期の較正暦年代

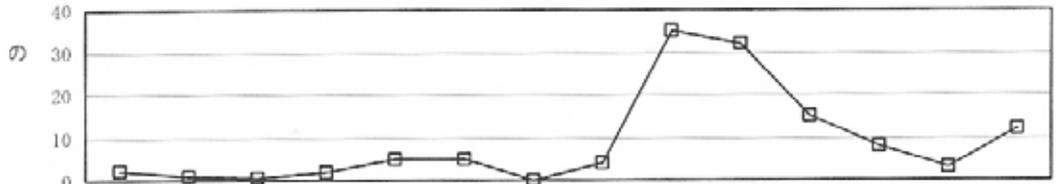


第4図 埋葬遺構の構成
[関西縄文研 2000] をもとに作成

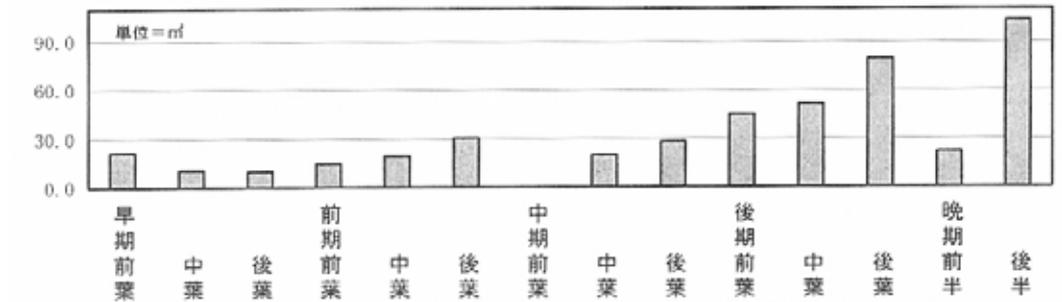
第5図 住居面積の総和の推移



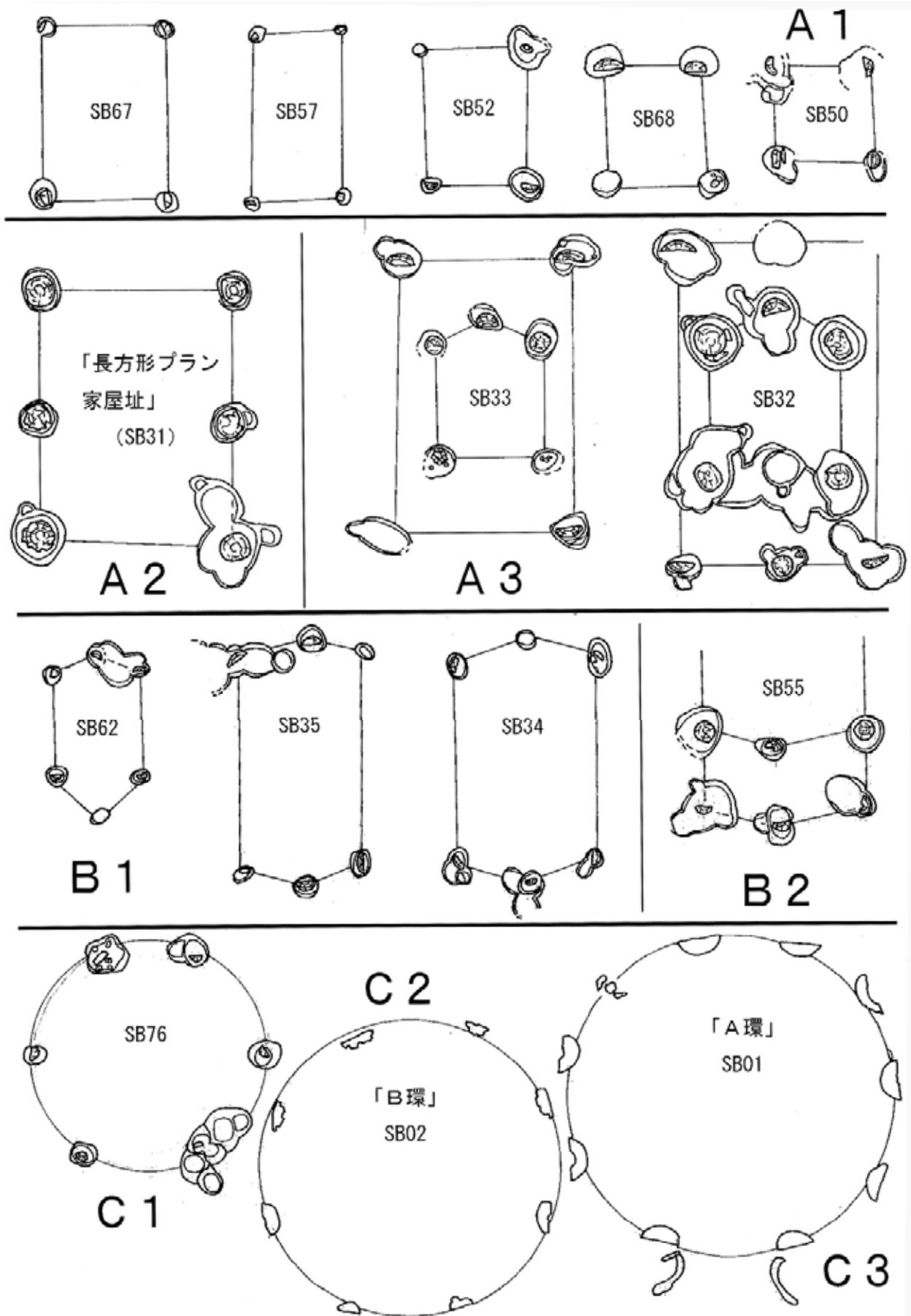
第6図 住居検出遺跡数の推移



第7図 住居検出遺跡における住居面積の和の平均値



第5～7図 住居に関する数値の推移



第8図 チカモリ遺跡の建物遺構

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどは、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075) 933-3877(代表) Fax (075) 922-1189